



南極

第24号

平成23年2月17日
南極倶楽部会報

あらためて「温故知新」を標榜して 渡邊興亜

平成11年10月20日に発行された「南極」創刊号の巻頭に初代南極倶楽部会長村山雅美さんが「温故知新」と題した一文を寄せられている。南極倶楽部に南極観測隊OBのみならず、観測船乗り組みの方々、南極旅行を楽しまれた一般の方々ら有志が集まり、極地探険、観測の歴史に関わる事柄、話題のみならず、最新の知見を、専門、年齢を超えて互いに披瀝しあい、切磋琢磨の議論を楽しみつつ、未来の発展を見据えた楽しい会にしようという思いを述べられたものである。詳しくは創刊号を改めて読んでいただきたい。

その村山さんは平成18年11月5日に逝去された。村山さんが熱心に提唱された南極OB会主催による南極観測50周年記念式典開催の一月前のことであった。平成16年には村山隊長率いる南極倶楽部ヒマラヤ旅行が挙行され、多くの会員、会員夫人等が参加され、村山隊長は再訪を念願にされていたサマ（ロー）

にまで足を伸ばされた。1953年にご自身が参加されたマナスル登山隊ではサマの住民の入山拒否にあい、その打開に苦労された話は南極（JARE15）観測時に幾度も聞かされていた。「南極」19号にはこの旅行の報告が残されている。こうした活動は「南極倶楽部」ならではの良き企てであろう。

「南極倶楽部」の第1回会合は平成11年2月17日、今は無くなった「おんぐるや」で開かれた。「南極倶楽部」発会の経緯は、その年の10月に発刊された「南極」創刊号に何人かによって記されているので、ここでは繰り返さないが、発会の発起人には代表村山雅美さん他26名の方が名を連ねておられる。

「南極倶楽部」発会から今年2月17日で12年、例会は144回目を迎えるに至った。残念な事ではあるが、この12年間に村山さん、田英夫さん、鳥居鉄也さんら8人の方々が鬼籍に入られた。海上自衛隊関係の幹事として、倶楽部の発足、経営に尽力された久松武宏さんは、円熟の境に達せられ、これからの

益々の活躍が期待されるなかで黄泉へ旅立たれた。50数年前に始まった南極観測隊の草創の頃からの方々が多数参加されているクラブであるから、表舞台からの静かな退場は自然の理ではあるが、クラブでの付き合いが活力の元となり、長生きされ、後進の者どもに蘊蓄を授けていただく事を願うばかりである。

あらためて「温故知新」の話題に戻れば、最近のクラブは「温故」の方は大いに盛んであるが、「知新」の場としては今ひとつの感が否めない。「南極クラブ」では現役との繋がりを重視し、例会幹事を決める幹事長には極地研の現役の方をお願いし、発会以来その方式は途絶える事無く続いている。しかし、数年前の国立大学および関連研究機関の改革以来、評価への対応などで以前に比べて雑用が増え、余裕が失われたという話をよく聞く。また若者の社会との付き合いの感覚が変ってきているとも聞く。そうしたことと関係があるのか、ないのか、最近では現役の人達の参会が減ってきているのは残念と言う他はない。

この度の例会会場の変更を機会に例会日を土曜日に移し、開始時間も3時間繰り上げ3時開会にした。これはクラブ会員の高齢化というか、フル・ジェネレーション化に対応し、

より参会し易い形への変更と理解願いたい。月に一回、老いも若きも一同に会し、「温故知新」の世界を楽しみませんか。

(南極クラブ会長、11次越冬)

ヒモムシを食った男たち(追記)

星合孝男

「ヒモムシを食った男達」のあらまし。

平成14年(2002年)10月17日発行の、南極クラブ会報「南極」の13号191-194頁に、「ヒモムシを食った男達」と題して、昭和基地周辺の浅瀬で獲れるヒモムシを食った話を書かせていただいた。

ヒモムシは魚肉を餌に入れた籠を、中の瀬戸とか北の浦など、基地の近くの海底に沈めて、1、2日置いておくと籠の中に入っている動物である。黄褐色で径2~3cm、長さ数10cm、太い紐と言った形で、ぬるぬるとして、体は軟らかく海から揚げた籠からダラリとぶら下がった姿は、ヒモムシの名に背かないものである。1975年16次越冬隊の仲間松本徂夫さんの提案で、焼鳥風に料理したが、硬くて噛み切れなかった。次に1982年23次の時、電離層の倉谷康和さんが酢の物にしたところ、結構食えた。倉谷さんに、どうして

こんな調理法を思いついたのかと尋ねてみると、彼の育った北九州の砂浜に埋まって生息しているユムシとヒモムシの姿が似ているので、同じ様に処理すれば食えるのではないかと考えたとのことであった。

ユムシはミミズに近く、ヒモムシとはずい分違う動物なのだが、テレビでお馴染みの小堺一機さんの父である、9次・15次の調理担当隊員の小堺秀男さんの言に依れば、ぬるぬるする動物は塩でよく揉んで、生で食うのだということであった。

たまたま1997年韓国を訪れるツアー旅行に参加した。釜山のチャガルチ市場を見学したところ、山積みของ生きた獲りたてのマボヤ、イカ、タコなどと、海水を張った桶に生きて伸びたユムシが並べられていた。残念ながらこの時には、ユムシを賞味する時間的余裕がなく、後髪を引かれる思いで市場を去ったのであった。

ユムシを食って

2000年秋、再び韓国を訪れる機会を得た。今度もツアー旅行、「韓国歴史紀行―世界遺産を訪ねて―」に参加したのであった。前回の旅行では、現地案内の女性の機転で、計画には組みこまれていなかった市場見物ができたのであったが、今回は釜山到着の翌日に、チャガルチ市場

の見物が予定されていた。

釜山のホテに入り、夕食を摂る時に、翌日から現地案内をしてくれるという若い女性が紹介された。梨花大学出身だという才媛であった。明日の昼食はチャガルチ市場で摂るとの説明があったので、早速、ユムシを食えるようにして欲しいと頼んでみた。韓国語でユムシを何と言うのかわからないので、さっとした絵を描いて、チャガルチ市場の桶の中に飼ってあるはずだと言うと、「あ、ゲブルです。」と即刻理解してくれた。

翌日、チャガルチ市場を一通り廻り、魚、ホヤ、イカ、サザエ、ホタテなどを見た後、昼食の席に着いた。刺身、生いか、生たこなどと並んで、紫褐色の細長くきざんだナマモノの入った皿が出てきた。ガイドさんは、私の顔をチラツと見た後、誇らしげに皿を指して、ゲブルだと言った。醤油をつけて口に入れると。歯ごたえのある魚の刺身の様な味であった。韓国の人達の好物ではあるらしく、ガイド嬢はパクパク食べていたが、私以外の日本人の多くは気味悪そうな顔をして、あまり箸が進まないようであった。ミミズと同じように、赤血球を持つ故の紫褐色の肉色が、うす気味悪く思われたのかもしれない。

思い出の中の酢の物のヒモムシと、

目の前にあるユムシの味とを比べることはできなかったが、歯ざわりは似ていた。そして、韓国の人、九州の人達が、それぞれの海辺で容易に獲れるユムシを共に食べていたのは、至極当たり前のことだと、改めて思えたのであった。

あとがき

2010年8月28日、朝日新聞朝刊に「食材」というコラムがあり、ケブル 酒に合う「大ミミズ」と題する一文が載っていた。稲田清英さんという記者さんの署名入りで、チャガルチ市場のユムシが紹介されていた。このコラムが本文を書かねばならぬと思わせてくれた。

なお、ユムシのことを韓国語でケブルと言うのか、ゲブルと言うのかは韓国語に暗い私にはわからない。本文中の併用、お許しいただきたい。

(16次、23次越冬 生物)

プロペラ翼の折損(2次)

—宗谷ノート(4)

高尾一三

船舶の通常航海ではプロペラ翼への衝撃はほとんどない。航海中、障害物を避けて航行するからである。しかし、砕氷船の氷海での航行中、氷塊によるプロペラの事故は多く報じられている。これは航行中、船首で破壊された氷塊が船底を通り両舷の

ビルジキールに誘導され船尾付近で浮き上がりプロペラに当たるため、2軸であればプロペラに当たる確率は1軸の場合より大きい。これはプロペラが外側に張り出しているからである。

氷海での最大の事故は、氷塊によるプロペラ軸とプロペラの損傷である。最悪の場合これらの事故は船舶の航行を不能にしてしまう。

宗谷は2次の航海で12月29日と3回、両舷前進原速中、左舷プロペラ(2回目はどちらかの舷かは不明)に氷海が当たり突然機関停止した。特に2月1日の航海ではプロペラ翼の折損事故を経験した。当時私は当直で船長を補佐し、航海の記録とエンジンテレグラフ(船橋と機関室を結ぶ連絡装置)の任務についていた。その当時の記録をもとに状況を追ってみたい。

2月1日

0310 「極地航海保安部署配置につけ」の船内放送、これより両舷前進原速、密群氷の中を前進する。

0337 途中小プールを過ぎ再び氷量9/10~10/10の密群氷内に入る。

0437 左舷機が175rpm(1分間回転数)から突然停止。プロペラに氷塊が当たったのだ。3回発動するも機関はかからず4度目にかかる。再び両舷機前進原速、その後、種々機関を使い前進する。

0520 長さ1.8マイルのプ

ールに入る。プールでの航行には異常な振動はなかった。

0531 再び密群氷にはいる。両舷機停止、次いで両舷機前進原速の指示、この時一瞬、船体に異常を感じた。

0535 両舷機停止、調査に当たる。その結果左舷プロペラ翼4枚のうち1枚の翼に3/4の折損事故が判明した。

1日の0437の左舷機の突然停止は氷海によるものだろう。この時プロペラ翼に何らかのダメージを与えたかもしれない。しかし、その後約10分間のプールでの航走には特に異常な振動はなかった。プール航走後、0531、再び密群氷に突入する時、翼の折損事故は起こった。

南極新聞（船内で発行されている新聞）2月1日（昭和33年）の記事によれば船長談として次のように記している。

「ブレイド（プロペラの翼）は5時半にバックでとれたものではなく、何処でとれたかよくわからない。氷海航海で散々痛みつけられた結果でしょう。」

今、この記事を書いているとき当時の船長の心情がこの談話の中に痛いほど汲み取れる。12月27日の氷海突入以来、1次の状況と違い宗谷に適した気象状況と氷状に恵まれず、連日の氷海での苦闘は強く船長の心の中に重くのしかかっていたであろう。

2月1日、船内ではアメリカの砕氷艦バートンアイランド号が宗谷の救助に向かうとの情報が流れた。船内には一気にバ号の到着前に氷海からの脱出という空気が広がった。約1週間続いた東寄りの強風が南風になり、今がチャンスと0310、宗谷は行動を起こした。この高揚した線内の空気の中でプロペラ翼の事故は起こった。船長の心の中は一瞬凍りついたに違いない。そして、「折損事故は認めたくない」と言うお気持ちをその時の談話の中から伺い知ることができる。

その後の宗谷は2月6日、42日ぶり氷海から自力脱出した。7月バ号と会合、その援助を得て再び氷海に入る。しかし厚い氷に阻まれ、ついに24日、氷海での63日間の苦闘むなしく「2次越冬」を断念した。

追記：「南極」第6号、第17号の只木照二氏（2、3次 宗谷機関）の投稿文を参考にしてください。

（1～3次 宗谷航海）

グリーンピース南極基地訪問記

池田 宏

1991年1月から2月、日本製探検船「フロンテア スピリット号」初航海で、ビクトリアランド、ロス海、ロス湾、ロス島へ向かった。同行講師は村山雅美先生。

ロス島にある100年前のスコットの越冬小屋を見学した後、同じ海

岸線を約200メートル離れた所に、グリーンピースがプレハブの小屋を建てていた。村山先生と共に小屋を訪れてみると、入り口でグリーンピースのメンバーがTシャツを並べて売っていた。土産品（Tシャツ）に見入った先生に、USダラーの入った私の財布を預けることになった。私は小屋の中に入ると、15畳ほどの広さで、ベットらしいものが並んでいるだけ。どんな研究作業をしているのかと聞いてみると、「サンプリングをしている」との答えに、私は「見せてくれるよう」突っ込むと、強いう口調で「それは出来ない」との答え。小屋の中を見回しても、それらしいものはなにもなく、顕微鏡らしきものすらない。

男女3組に各自の職業を問うと、小学校の先生、銀行員等、短い答えしか返ってこなかった。3組の男女は私の前でキスをし続けている。続けて私の口から出る質問に、「出ていけ！」と大声を張り上げてきた。「誰が40ドルもするTシャツなんか買うか！」と大声で答えを返してしまった。

それから数年後、南極一周クルーズの最中、グリーンピースのメンバーと称する40代の白人女性にこの話をすると、夏期の一時的な小屋にしろ、そのような行動をメンバーが行っていることなど知らされていないとの答えが返ってきた。

この話しを南極専門家にすると、

南極大陸全体を誰も管理出来ない。誰でも上陸しテントや小屋を建てても禁止することは出来ないとのこと。

大陸の地図には領土権を主張するかの様に線が引かれているのをよく見かけるのだが。

南極関係者の一部には、一般民間人「観光客」の南極大陸に上陸することに批判的な意見があると聞いている。

一般人の中には、多くの海外旅行を体験し、もう行くところがなくなり、「南極にでも行くか」と経歴に箔をつけるためにやってくる「観光客」もあれば、私の乗船する砕氷船の66パーセントの客はリピーターばかり。それぞれ南極についていろいろと勉強し、船内での専門家の講義を聞き、討論を重ね、知識と体験を喜びと幸福を感じながら、クルーズを続けている探検人達もいるのです。

南極倶楽部では、専門家と探検人がおたがいに、南極歴史、現在、未来を語り合っていきたいと思いつつ、2010年12月より砕氷船で南極大陸に向います。

南極倶楽部 12周年記念例会

幹事 神山考吉

平成11年2月17日、「南極倶楽部」の発会パーティを神田の「おんぐるや」で開催したのはちょうど12年前の今日でした。「おんぐるや」から「桃山」に引き継いでからも多

くの会員の皆様から励まし、協力をいただき、ほとんど休むことなく、今日まで続けることが出来ました。

例会の会場をご提供いただいていた「桃山」は今年の3月をもって閉店することになりました。

本日の第144回の例会は「桃山」への感謝例会であると同時に、これから予定されている新しい会場、「菜の家(なのや)」での盛大な例会を期しての例会になります。懐かしい場所での最後の機会ですので、多数のご参加をお願いいたします。

今後の例会は第3土曜日、「菜の家」において15時～17時に開催します。ただし、次回(第145回)の例会は都合があって、第4土曜日の3月26日に開催しますので、お間違いのないようにお願いします。

3月例会：平成23年3月26日(土)、「菜の家」(千代田区三崎町2-21-1、電話：03-3234-232)、15:00～17:00。

4月は16日(土)の予定です。

— 編集後記 —

平成23年の新年に入り、皆様にとってはますますご盛栄のこととお喜び申し上げます。

南極倶楽部会報「南極」は、平成11年10月20日に創刊号を発行して以来、平成19年6月21日、第23号(村山雅美追悼号)発行の後、今日まで休刊中になっておりま

した。編集幹事としてはそれ以後、会報の方針も出さずじまいで、誠に申し訳なく思っています。

規則に縛られず、自由に会を運営していくことと、堅苦しくない会報の発行は南極倶楽部のモットーでありましたが、おかげ様で会員同士の親睦をはかるうえで貢献したばかりではなく、平成18年度に開催された数々の南極50周年記念事業の成功を導くために大きな力になったものと信じています。現在、会報「南極」はOB会のホームページで公開されている状態です。

今後の会報のあり方については、これまでも、何度かの例会で、皆様のご意見を拝聴いたしました。

とくに昨年のOB会総会・ミッドウインター祭を機会に、南極倶楽部会報のあり方を考えてみたいと思い、何度かの号外を出しました。その後の意見、提案が以下ように出ていました。

会報「南極」は原文を尊重し、自由投稿であったが、読み返してみると記録に残るものであり、比較的格調高い?ものがほとんどである。これが南極倶楽部そのものの原動力になっていた。

初代村山会長の会報の精神?「温故知新」、昔を辿って、それを書き留める事により、新しい何かが生まれ

る。この事は継続すべき事ではないか。

南極観測の所産、アーカイブスの収集と保存は今や必須のイベント、昔を語れば語るほど、泉のごとく湧き出る物、語り部の物的証拠がアーカイブス。

皆さんの意見をまとめて、現在では、以下のような方針を決めています。

- ・南極倶楽部の会報「南極」はこれまでの趣旨、体裁を踏襲しつつ、24号（2月発行予定）より出版を開始する。
- ・年4号（1、4、7、10月）を目指しつつ、原稿が揃い次第発行する。頁数にはこだわらない。
- ・アーカイブスに関する話題は歓迎。
- ・OB会（地方支部を含む）、南極教室、50周年記念事業および白瀬南極探検100周年記念事業などと協調しつつ、会報を発行する。

従いまして、以下の要領で南極倶楽部会報「南極」の原稿を募集します。

第24号は2月17日の例会で発行しますので、本原稿募集は4月号になります。

原稿募集

原稿内容：南極の思い出、随想、記録、報告など（写真、図表歓迎）

原稿締切：3月31日（木）（第25号4月発行予定）

字数：1000～4000文字、原稿用紙(400字)で3枚～10枚、ワードのファイルでA4版2～3枚程度（現在の会報の1頁が約1400字）。

原稿締め切りは一応設けますが、不定期で受け付けます。また、原稿の字数は目安でとくに設けません。長ければ、途中で切って、次号に続きで繋がります。

送付先：原稿を郵送か、Faxで下記の連絡先までお送りくださるか、メールに添付（メールに張り付けでもかまいません）でお送りください。

連絡先

神田啓史、大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立極地研究所

〒190-8518 東京都立川市緑町10-3

TEL: 042-512-0770

FAX: 042-528-3195（変更予定）

e-mail: kanda@nipr.ac.jp